

ザ・ボイスメール 11月分

### 「人間的なフランス」・・・進んでいる？それとも頹廃している？

飛ぶ鳥は撃ち落とされることが多いのだろうか？先ごろの橋下大阪市長の不倫報道にふと思った。男と女の関係は生きている人間がいる限り存続してきたしこれからも存続していくものである。ただそれが有名人となったとき、マスコミは格好の“売れるネタ”として飛びつき、市民はそれを格好の“井戸端の話題”としていく傾向がある。

市民から選ばれた政治家が私生活面でも清潔であることは理想だろう。でも、男と女の関係にはそれぞれの事情や背景があり、第三者が軽々しく論じられるものでもないだろう。国の伝統や社会事情によってはそのとらえ方は大きく異なっている。

この7月、私は『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の文学紀行でパリを訪れるにあたり、何冊かのフランス事情についての本に目を通した。そのなかで出版されたばかりの「なぜ、フランスは一目置かれるのか——プライド国家の流儀」（山口昌子著 産経新聞社）は、視点が鋭くユニークで実に面白かった。

新聞記者生活のうち後半の21年間をパリ特派員として過ごした著者は、政府の政策に対し賛否をはっきり表明し、しばしばデモやストに訴える“誇り高く勝手な”フランス人の国民性について分析する一方、「自由・平等・博愛」の国是を体現するフランス人の魅力についても紹介している。

まず、現在、日本国内でも熱く論議されている原発について：

「フランスで過去『脱原発』の運動が成功しなかった背景には『国防なき国家に独立なし』との認識による核抑止力堅持という国防政策のなめがある」

「『原発』はフランスの基幹産業である」

「軍事パレードにはもちろん、フランスの基幹産業である軍事産業の装備品がいかに優秀であるかを世界に知らしめる見本市の意味もある」

「フランスは58基の原発を擁する『原発大国』だけに安全には神経を使っている」

等と報告している。

そして「フランス人には『革命の思い出』が遺伝子としてすりこまれているのかもしれない」と：

「フランス人たちは王政、革命、共和制、帝政、王政復古、共和制とめまぐるしい体制変換を乗り越え、20世紀に入ってもドイツによる占領、パリ解放、第五共和制誕生、脱植民地、ベルリンの壁崩壊などの歴史の節目に直面してきた」

と私たちが中学・高校時代に勉強してきた世界史を紹介している。

ほかにも面白い視点と分析が多いが、最初のテーマ「男と女の関係」ではもっと“フランス的”でユニークである。以下、著書からそのまま引用してみると：

「少子化対策の陰には『人口は国力』とのフランスの基本的な考えに加え、結婚の形態が変わったこともある。70年に新生児のうち6%だった婚外児は、08年には52%と半数を

超えた。05年には民法から『婚外児』の文字も消えた。ロワイヤル氏には4人の子どもがいるが、いずれも婚外児だ」

「ジスカールデスタン元大統領には“朝帰り”のスキャンダルがあり、ミッテラン元大統領には隠し子がいた。シラク前大統領夫人は、ハンサムで女性に人気のあった夫のため若いころ、嫉妬に苦しんだと吐露している」

「フランスでは売春斡旋業は禁止されているものの、自らの意思で世界最古の職業と言われる仕事を選ぶのはおとがめなしだから・・・」

「サルコジ氏は在任中に離婚、結婚（しかも3度目）をした初めての大統領。ミッテラン大統領は、就任時からすでに前立腺がんを侵され、隠し子もいたがこの二つの秘密は塗りこめられていた」

「オランダ大統領もロワイヤル氏との間に4児がありながら、正式に籍を入れず、新しい夫婦の在り方を示した。現在は『パリ・マッチ』の記者と同居中だ」

——つまり「フランス人は『私生活は問わず』が原則だ」と分析しているのである。

これらのレポートをどう考えたらよいのだろうか？日本に比べてかなりフリーとも思われる男と女の関係。人間的なフランスを“進んでいる”と見るのか、それとも“頹廢に向かっている”と見るのか？微妙なところではある。

ところで、フランスがこうだからといって、日本の政治家が同じような状態で良いと言っているのではない。「日本には日本古来の奥ゆかしい伝統や文化、生き方があり、それを大切にしていってほしいと私は思っている。

さて、最後に指導者には少々きつい記述と庶民には少々ゆるやか（過ぎる？）記述を紹介したい。

まず指導者に：「国家は国民を守る——フランスで大惨事が発生したら、国家元首は即刻、三色旗を前に、ラジオ・テレビ演説し、事態の詳細を伝え、『政府を初め当局が全力で国民を守るから安心しろ』とメッセージを発するだろう」

そして8月になると政治家を初め企業のトップから一般庶民まで夏休みを取る状態を：「じっとパリにとどまっているのにはちょっとした勇気がいるほど、バカンスはフランス人にとって『強迫観念』になっているようにみえる」

いかがだったでしょうか？

文学紀行の前に、フランスの伝統や文化、歴史事情の一端をご紹介します。

## 『三銃士』——主人公たちの血沸き肉踊る冒険

とにかく面白い小説だった。文学少年でもない自分が本を読むようになったきっかけを作ってくれた作品だった。それは中学2年の秋、読書週間が始まるのを前に担任の先生が「何でもよいから本を読みなさい」と指導されたことから始まった。そして学校の図書館でたまたま手にした本が少年版『三銃士』だったのだ。

読み始めると止まるところがなかった。日本式に言えばチャンバラ小説である。主人公ダルトニアンと三銃士たちの胸のすくような活躍。たくらみを抱く枢機卿から王妃を守ろうとする4人の“血沸き肉踊る”冒険ぶりがたまらなかった。

あらすじは次のようだった。

ガスコーニュ出身の田舎貴族ダルトニアンは、銃士になることを夢見てパリに出てくる。ところがパリへの道中で謎の騎士に紹介状を盗まれてしまう。挙句、成り行きで銃士隊でも名を馳せる三人衆アトス・ポルトス・アラミスと決闘をする羽目になる。

ダルトニアンは意を決して決闘に赴いたが、アトスとの決闘を始めた途端に枢機卿リシュリーの護衛士が現れる。決闘は中断となり、三銃士と護衛士の戦いとなる。ダルトニアンは三銃士の仲間として護衛士と戦う事を選び、枢機卿派きっての剣客ジュサクを下して三銃士側を勝利させる。この事件でダルトニアンは三銃士の仲間入りを果たした上に、トレヴィルや国王からも一目置かれる存在となる。

ある日、ダルトニアンは家主ボナシュエの依頼で彼の妻である王妃の下着係コンスタンスを探す事になる。彼はコンスタンスに恋をし、そこから枢機卿リシュリーの陰謀に陥れられる寸前の王妃の危機を知る。強引にコンスタンスの依頼を受けたダルトニアンはバッキンガム公爵からダイヤの飾り紐を返してもらうため、三銃士とともにイギリスを目指す。イギリスでは謎の貴婦人ミレディーが暗躍していた。

最初に小説に触れてから半世紀以上たった今年の夏、ユゴーの『レ・ミゼラブル』の取材と併せて作品の舞台パリを訪れることになった。そんな矢先の4月、地元・昭島市の映画館では「三銃士」が上映された。現代風にアレンジされた3D映画で、カラーフルの活劇で面白かった。でも原作からかなり飛躍した部分があるようにも思われた。本当に楽しむためには、やはり原作にはしかず。私はパリの舞台を訪れる前にいくつかの翻訳本に目を通して見た。

『三銃士』のファンは意外と多い。その何人かはネットで作品の舞台を写真入りで紹介している。パリを左岸と右岸に分け、ダルトニアンさらにアトス、ポルトス、アラミスの三銃士が住んでいたという下宿まで地図で示している。

私は物語の中で王と王妃、それに枢機卿が駆け引きを繰り広げた主舞台となったルーブル宮殿、それに作者アレクサンドル・デュマと三銃士およびダルトニアンが一つにまとめられた彫像の立つリュクサンブール公園を訪れた。

セーヌ川河畔の広大な敷地に広がるルーブル宮殿のほとんどすべての建物には、その最上部にいたるまで芸術的な彫刻が残されていた。今はルーブル美術館となり展示作品の多さと質で世界の三大美術館の一つに数えられるようになり、デュマが描いた当時の模様とはかなり変容している。

たぐいまれな性格のヒーローが敵の陰謀をかいくぐり、縦横無尽の活躍をする。面白くてそこから文学少年でもない自分が本を読むようになった。さらにそれは、定年後の「世界文学紀行」へとつながっていった。紀行の第一作目がなんとセルバンテス作の『ドン・キホーテ』、そして第 15 作目がこの『三銃士』となった。両作品の主人公の性格が極めて似ているのも何か関係があるのかもしれない。面白い一書は読者にどれほどの夢を広げていくことか！その典型の一つが『三銃士』だったのである。